

奄美民謡「諸鈍長浜節」の系譜

小川学夫

The Genealogy of 'Syodonnagahama-busi', an Amami Aria Folk Song

Hisao Ogawa

奄美諸島に「諸鈍長浜節」という加計呂間島諸鈍集落の長浜や乙女を歌った歌が流布する。諸鈍はかつて琉球文物の流入口として栄えた土地であるが、実は沖縄にも「諸屯節」「しゅんどう節」といった諸鈍を歌った歌が知られている。当然、これらは同系曲であると考えるのが自然であるが、各曲の印象があまりにも違うために、もともとひとつの歌と断定する決め手はなかった。そこで本論では、それぞれの歌の歌詞やハヤシコトバなどを比較することにより、その系譜探索の試みを行った。その結果「諸鈍長浜節」「諸屯節」は明らかに同系曲であり、「しゅんどう節」は歌詞だけのつながりであることが明白となったのである。なお、「諸鈍長浜節」系統の曲が奄美各地では、ジャンル（遊び歌、八月歌）を越えて歌われ、なおかつ全く曲名や歌詞を変えて各地で歌われていることもはっきりした。このたび、それらの根拠をしめしながら伝承の実態を提示した。

Key words : [諸鈍長浜節] [諸屯節] [奄美民謡] [琉球古典音楽]
[琉歌百控]

(Received September 15, 2006)

[目次]

はじめに、凡例

1. 奄美大島、加計呂麻島の遊び歌「諸鈍長浜節」の特徴
2. 『琉歌百控』のなかの関連歌
3. 古典音楽のなかの関連歌
4. 古典音楽と臼太鼓踊りの歌「謝敷節」との関連
5. 奄美大島、加計呂麻島における八月歌のなかの関連歌
6. 喜界島における関連歌
7. 徳之島における関連歌
8. 沖永良部島における関連歌
9. 与論島における関連歌

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻人間文化コース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番地1号）

はじめに

奄美民謡に「諸鈍長浜節」という歌があることを知ったのは、岩波文庫の『日本民謡集』^(註1)であった。奄美の民謡として扱われているのは、この歌と「朝花節」「俊良節」「くるだんど節」の4曲である。私事ではあるが、1963年にはじめて奄美の旅を企て、調査地として加計呂麻島の諸鈍集落を選んだ理由のひとつは「諸鈍長浜節」が印象に残っていたためである。瀬戸内町の古仁屋からポンポン船で先ず生間集落に渡り、そこから峠越えをして諸鈍に行く。その峠を登りきったところから見る諸鈍の長い浜は、正に歌の文句のように、その白波で娘さんが笑ったときの歯並びのように見えた。その感激は今でも鮮明に思い出す。諸鈍集落に入って、古老から話を聞くうちに、諸鈍が昔、琉球文物の流入口として重要な土地であることも実感した。

以来、この曲については私もいろいろなところで扱ってきたことは事実である。しかし、この曲のしっかりした系譜を確認する作業はまだであった。まだ不明な点もあるにはあるのだが、現段階で分かったことを書き記しておきたい。

(凡例) 歌詞や歌い方の引用については、主に次の著書によったが、[] のように略した。『日本庶民生活史料集成 第十九巻 南島古謡』[史料集成]^(註2)、『南島歌謡大成 奄美篇』[大成(奄美)]^(註3)、『五線譜 琉球古典音楽』[古典]^(註4)、『日本民謡大観(沖縄 奄美) 沖縄諸島篇』[大観(沖縄)]^(註5)、『琉球芸能事典』[事典]^(註6)、『日本民謡大観(奄美 沖縄) 奄美諸島篇』[大観(奄美)]^(註7)、『奄美の遊び歌楽譜集 日本民謡大観(沖縄 奄美) 奄美諸島篇 補遺』[大観(奄美 補遺)]^(註8)。

実際の詞章引用に当たっては、『琉歌百控』以外は、左にひらがなで歌詞を、カタカナでハヤシコトバ、ナゲコトバを記し、右に共通語訳を付した。詞章の記載については、本文の発音をできるだけ尊重したが、段分けや歌詞とハヤシコトバの区分などについては小川が統一した。共通語訳は本文に付けられているものもそうでないものもあったが、採集者の見解を尊重しながら『琉歌百控』も含め全体を小川が付した。各詞章について採集地が判明しているものはそれを記し、かつ出典を上略記に従って記した。

1. 奄美大島、加計呂麻島の遊び歌「諸鈍長浜節」の特徴

「諸鈍長浜節」は奄美諸島各地に流布し、遊び歌(しまうた)^(註9)として歌われたり、集団歌舞、八月踊りの歌^(註10)として歌われている。本稿では、奄美大島と加計呂麻島の遊び歌「諸鈍長浜節」を出発点として、系譜調べの旅に出ることとする。

先ず、諸鈍にきわめて近い加計呂麻島諸数集落に伝わってきた「諸鈍長浜節」をみてみることにしたい。奄美大島、加計呂麻島各地の他の「諸鈍長浜節」も、旋律、テンポなどに多少の異同はあるにせよ、文字化すると次のように歌われる点で、ほぼ一致するといっていよう。

ハレイー

しゅどうんぬ ながはまに

うちあげひく なみや

ヒヤルガフェー

ハレイー

しゅどうんぬ みわらびいぬ

諸鈍の 長浜に

打ち上げては引く 波は

諸鈍の 女童(乙女)の

わらい はぐき

笑ったときの 菌莖

ウッセ ヒヤルガフェー

*大観（奄美）585頁

そのほかの採譜資料なども含めて、この歌の特徴をあげると、以下のようになる。

- ① 8886調のいわゆる琉歌調歌詞が歌われること。
- ② 「諸鈍」や「諸鈍長浜」の地名が入った歌詞が歌われる傾向のあること。
- ③ 奄美民謡に多い歌詞反復が、この歌にはみられないこと。
- ④ 「ハレイー」のハヤシコトバが、上の句、下の句の頭に歌われる傾向のあること。
- ⑤ 「ヒヤルガフェー」に近いハヤシコトバが上の句の後ろにつき、「ウッセ ヒヤルガフェー」のハヤシコトバが下の句それぞれの後につくこと。
- ⑥ 音楽的には上の句、下の句の旋律は異なること。
- ⑦ 遊び歌の楽器は通常、サンシン（三味線）であるが太鼓の加わる地域もあること。

ここで、①②を補うために、「諸鈍長浜節」で歌われ、かつ「諸鈍」という地名が出てくる歌詞をあげておこう。

- | | |
|---|---|
| ○しょどん ながはまぬ
いかやながさ あていも
いきゝじ ながはまぬ
ういや いきやぬ | 諸鈍の 長浜の
如何に長さが あっても
池地（地名）の 長浜の
上は いかない *奄美大島用 大成（奄美）483頁 |
| ○しょどん ながはまに
うちあげえひく なみや
しょどん めわらぶえぬ
わらい はぐき | 諸鈍の 長浜に
打ち上げては引く 波は
諸鈍の 女童（娘）の
笑ったときの 菌莖のよう *同上 |
| ○しょどん ながはまや
やまとがれい とよも
しょどん めわらぶえや
しまじゅ とよも | 諸鈍の 長浜は
大和（本土）まで 名が聞こえる
諸鈍の 女童は
島中に 名が聞こえる *同上 |
| ○うらうらぬ ふかさ
しょどんうらぬ ふかさ
しょどん めわらぶえぬ
おもいぬ ふかさ | 浦々の 深いのは
諸鈍の浦の 深さ
諸鈍の 女童の
思いの 深さ *同上 |
| ○しょどん めわらぶえぬ
いきゃきよらさ あていも
わしま めわらぶえぬ
ういや きらぬ | 諸鈍の 女童の
如何にきれいで あっても
吾がしま（集落）の 女童の
上は 越えない *同上 |
| ○しょどん めわらぶえぬ
ゆきのろぬ はぐき
いちが ゆぬくれいてい
みくち すわな | 諸鈍の 女童の
雪のろ（意味不詳「雪を塗った」説あり）の 菌莖
いつ 夜が暮れて（日が暮れて）
御口を 吸えるか *同上 |
| ○しょどん みやらべぬ | 諸鈍 女童の |

つらみりば きよらさ

ぬぬうらち みれば

ゆがた ひがた

顔見れば きれい

布を織るのを みれば

ゆがんだり ひがんだり *採集地不詳 史料集成 99頁

この「しよどん」を「しゅどん」「しゅどうみ」「しゅどうぬ」などといったり、「めわらぶえ」「はぐき」も、「みやらび」「めわらべ」「はぐち」などといろいろな発音で記載されているが、それらは方言差、ないし採集者の記載するさいの癖のようなものであり、もとは同じとみなして間違いでないであろう。遺漏はあるかもしれないが、大方は挙げ得たと思う。

次に奄美の各島各地をみていく前に、沖縄の方に目を転じてみたい。なぜなら、沖縄の古典音楽^(註11)に「諸屯(しゅどうん)」といわれる曲があり、昔から「諸鈍長浜節」との関連が取り沙汰されているからである。

2. 『琉歌百控』のなかの関連歌

琉球王朝のなかで18世紀末から19世紀はじめにかけて編纂された琉歌集に『琉歌百控』^(註12)というのがある。三流からなっていて、「乾柔節流」には45節(曲)90首、「独節流」には50節、100首、「覧節流」には51節、102首の琉歌が収載されている。そこに出てくる曲名や歌詞は、大方が現行の古典音楽のなかにみられるものである。

この「乾柔節流」に「諸鈍節」という曲名がみえる。これには「東間切之内潮殿村」と付記されており、この「潮殿村」が今日の諸鈍であることは間違いでない。

この節には、次の2首が記載されている。(原文のままに記す)

○しゅとん宮童の

共通語訳略

雪色の齷

いつが夜の暮れて

御口吸わな

*庶民集成358頁

○しゅとん長濱に

共通語訳略

打い引波や

しゅとん宮童の

目笑齷

*同上

ここにある「しゅとん」が「諸鈍」であることは疑いをいれないが、いずれにせよ、文字に頼らない奄美民謡にあって、200年近くもほとんど変わらない形で歌われているというのは、考えようによっては奇跡的である。『琉歌百控』を編むに当たって琉球王朝の楽人たちが、この歌を諸鈍ないし、その近辺の人から聞き取ったことは事実だとしても、後年奄美の人たちが何らかのかたちで琉球から学んだことも考えられる。

ところで、この「諸鈍節」と類似の曲名が、『琉歌百控』の「独節流」には「志由殿節」として(庶民集成381頁)、「覧節流」には「主武堂節」(同369頁)、「潮殿節」(同397頁)としてあがってくるが、いずれも歌詞のなかには全く「諸鈍」は出てこない。ただ、「主武堂節」の場合、2首のうちの1首が、

○我主よる戀や

干瀬に打小波

わがする戀は

干瀬に打つ小波に似て

寄付も思は
別て行き

寄り付いたと思うと
すぐ別れていく

*庶民集成395頁

のように、海と波が表現されているという点で、「諸鈍節」に一脈の繋がりが認められるだけである。いずれにせよ3者とも、曲名に「諸鈍」の名残りはあるものの、歌の文句の中には「諸鈍」はでてこないということである。

『琉歌百控』との関連は以上であるが、私たちは、今日に伝わる古典音楽との関係ももちろん無視し得ないものである。

3. 古典音楽のなかの関連歌

私は現在、古典音楽の中から、「諸屯節」「しょんだう節」「遊諸屯節」の3曲を「諸鈍長浜節」となんらかの関連ある歌とみている。そのことを証明するために、代表的歌詞とその歌い方まで記しておくこととしよう。

「諸屯節」の場合

代表的歌詞

○まくら ならびたる
いみぬ ついりなさや
ついちや いりさがて
ふゆぬ やふあん

枕を 並べて過ごす夜も
夢の つれないこと
月も 西に入って
今は冬の 夜半

*古典97頁

○しゅどうん みやらびぬ
ゆちのろの はぐち
いついか ゆぬくりてい
みくち すわな

共通語訳略（前掲歌詞と同じ）

*同上

歌い方（歌詞は前のもの）

まくら な（あ）らびた（あ）る
ゆみぬ ついりなさ（あ）ゆ
サトウヌシヨウ
ついちや いりさ（あ）が（あ）て
ふゆぬ やふあん
アリ サトウヌシヨ

*古典94-7頁

2番目の歌詞が、「諸鈍長浜節」と、また『琉歌百控 乾柔節流』の「諸鈍節」とも同じものだという事は重要である。

歌い方においては、琉歌調歌詞が繰り返しなしで歌われるということ、上の句、下の句のそれぞれのあとにハヤシコトバがはいること、上の句、下の句の旋律は異なるという点以外には「諸鈍長浜節」との共通点はない。しかし、歌詞以外に考えられる両者の確たる繋がりは、次にあげる「遊諸屯節」によって明らかになるのである。

「遊諸屯節」の場合

代表的歌詞

○でいちゃよう うしついでい さあ行こうと 押し連れて

ながみやい あすいば 月を眺めて 遊ぼう
きゆや なにたちゆる 今日 名も知れたる
じゅぐや でむぬ 十五夜 だもの

*古典355頁

歌い方 (前掲歌詞)

でいちゃよう うしついでい ハリ
ながみ ヨウやい あすいば ハリ
ヒヤルガヒ
きゆや なにたちゆる ハリ
じゅぐや ヨウ でむぬ
アシュンサミ
ヒヤルガヒ

*古典354-5頁

曲名につく「遊」の意味を考えてみたい。これがつくのは、古典音楽のなかにも、この曲だけでなく「遊子持節」「遊しゃうがない節」などがある。おそらく、この歌詞からも窺えるように、野外での遊びの場で歌われたところから付いたものではないかと思う。『琉球芸能事典』の「遊諸鈍節」の解説には「舞踊のために諸鈍節から派生した歌ではないかと言われている」(166頁)とあるが、諸屯節が古典舞踊の重要な曲であることはすでに知れ渡っている。ここに「遊」と付したのは、王朝の中の権威ある古典とは違った、遊びのなかの歌舞だという意識があったからではないだろうか。

といって、私は「諸屯節」からの派生だと決め付けることは早計だと思う。歌詞のなかには、確かに「諸鈍」が出ておらず、「諸鈍長浜節」とは全く異なる歌のように見える。しかし、次の2点において「諸鈍長浜節」と同系曲であり、かつ古形を残したものであることが知れるのである。

まず、「ヒヤルガヒ」というハヤシコトバが、奄美の「諸鈍長浜節」の「ヒヤルガヘー」に一致することである。私はこれまで、奄美の歌の系譜を探るのに、歌詞よりもハヤシコトバの比較の方がいかに重要なポイントとなるかをいつてきた者だが、この場合もまさに適合する。

次に、「諸屯節」との決定的な違いとして、「遊諸屯節」は上の句と下の句の旋律が、完全ではないが、ほぼ同じものだという点である。

この点についても、かつて私は沖縄の古典音楽の詞形、反復形、ハヤシコトバの位置、旋律等について上の句と下の句の関係を調査したことがある。その結果、いずれも均衡形から不均衡形へと移行していくことが明らかになった。

この「遊諸屯節」でいえば、歌詞の詞形だけをみれば上の句88調、下の句86調で明らかに不均衡だが、ここでは「アシュンサミ」というハヤシコトバを入れることで、下の句を88調に近くしているのである。歌詞反復は上の句、下の句共がない。ハヤシコトバでいえば、上の句、下の句それぞれの後ろに同じ言葉がおかれている点で均衡である。きわみは旋律が、上の句、下の句ほぼ同じだということである。奄美の「諸鈍長浜節」も、沖縄古典の「諸屯節」もこの点違っている。上下句同旋律であるという点で、「遊諸屯節」こそ最も古形を保っていることは疑いをいれないのである。

「しよんだう節」の場合

代表的歌詞

○しゅどうん ながはまに 共通語訳略
 うちあいふいく なみぬ
 しゅどうん みやらびぬ
 みわれ はぐち

○しゅどうん みやらべぬ 共通語訳略
 ゆきぬるぬ はぐち
 いついか ゆぬくりてい
 みくち すわな

歌い方（歌詞は前者）

シュンドウ
 しゅどうん ながはまに
 ヨウア シュンドウ
 うちあいふいく なみぬ
 ヨウア シュンドウ
 しゅどうん みやらびぬ
 ヨウ シュンドウ
 みわれ はぐち
 ワタチャンド
 アシェウキ トウタサ

歌われる歌詞のうえからは、最も「諸鈍長浜節」に近いものといえる。しかし、明らかに「諸鈍」が歌われているのに、「諸鈍節」という当て字はされず、「しよんだう節」とされてきたのは、どういう理由だからだろうか。

問題は、「シュンドウ」というハヤシコトバにありそうである。「シュンドウ」と「しゅどうん」はほんのわずかの違いであるが、歌う人や記録者はハヤシコトバ「シュンドウ」にこだわったというしかない。一首を歌い終わるのに、4回も繰り返されているのである。

ここでこの歌が、沖縄では「醜童」と当て字される舞踊の曲として用いられていることに気付くべきである^(注13)。この踊りについて簡単に述べると、それは「打ち組み踊り」といわれ、「しゅんどう節」「それかん節」「やれこのしい節」の3曲をもって一つの話をもつものである。それには仮面を被った醜女二名と素顔の美女二名の丁々発止とやりあう滑稽な踊りである。私は、今も諸鈍に伝わる民俗芸能「諸鈍しばや（芝居）」のことを考えざるを得ない。諸鈍しばやに醜女が出てくる演目はないが、出演者がほとんど、「かみずら」と呼ばれる面を被るという点で共通する^(注14)。

今のところ、確たる証拠はみつからないが次のようにいえるはしまいか。「しゅんどう節」はもともと「諸鈍」とは何の関係もない歌の一つであった。しかし、発音が余りにも近いと、宮廷の楽人達は諸鈍を歌った歌詞をそれに付けて歌うようになった。当時から、沖縄でも諸鈍しばやの存在がよく知られており、ある時期ほかの2曲を加えて、芝居仕立ての舞踊にしたの

ではないか、と。

いずれにせよ、3曲を観察していえることは、奄美の「諸鈍長浜節」にもっとも近いものが、「遊諸屯節」だということである。「諸鈍節」と「遊び諸鈍節」とは明らかに姉妹曲である。「しゅんどう節」は発音は「諸鈍」に似ているが、もとは別の言葉で、ただそれに引きづられるような形で諸鈍を歌った歌詞を用いたのではないかというのが、今考えられる結論である。

4. 古典音楽と臼太鼓踊りの歌「謝敷節」との関連

「諸鈍長浜節」と沖縄音楽との関係はこれで終わったわけではない。

○しょどん ながはまに
うちゃげえ ひくなみや
しょどん めわらぶえぬ
わらい はぐき

の、一句目だけが違った歌詞と、それを本歌とする曲が存在するからである。それは前掲『琉歌百控』にも、現行古典音楽のなかにもある「謝敷節」と、沖縄本島各地に伝わる民俗芸能、臼太鼓踊り^(注15)の「謝敷節」である。

初めに『琉歌百控 乾柔節流』にのる歌詞と、『五線譜 琉球古典音楽』に記述された歌われ方を示しておく。

歌詞

○謝敷 板干瀬に	謝敷の 板干瀬に	
打へ引波の	寄せては引く 波は	
謝敷 宮童の	謝敷の 女童の	
目笑 齧齒莖	目笑い 齒莖	* 庶民集成364頁
○謝敷 宮童の	謝敷の 女童の	
はなまさい 姿	花よりもまसार 姿	
わらいかを みれば	笑い顔を 見れば	
あけちや くさへ	まだあどけ ない	* 同上

歌い方

じゃじち いたびしに
うちゃいふいく なみぬ
エウネ
じゃじち みやらびぬ ナ
みわれ はぐち
ウネエイ シュラヨウ

「謝敷」は国頭の一地区名で今も存在する。『琉歌百控』にも「謝敷節 国頭間切謝敷村」とあるから確かである。

曲を比較する限り、ハヤシコトバのうえからも、「諸鈍長浜節」との関連性をいうことはできない。

しかし、歌詞の上で「諸鈍長浜」と何らかの接触がなかったとも、もちろん考えにくい。と

いって、「諸鈍」が「謝敷」に変わったとも、その反対とも断言する証拠はないのである。

国頭は奄美に最も近い地域であり、昔は山に囲まれた集落であった。対して諸鈍は琉球文物の流入口ともいうべき都である。「諸鈍」系の歌詞が沖縄でも広く歌われていたことも考えあわせ、「諸鈍」のほうが最初の歌であったという理由付けも可能である。しかし、表現上「長浜」よりも、板のように見える干瀬、つまり「板干瀬」の方が「菌茎」をイメージしやすい、という見方もできないわけではなく、そうすれば「謝敷」先行説のほうが有利と考えられる。

次は、おそらく『琉歌百控』の編集者たちが聞いたと思われる、国頭地方の臼太鼓踊りの歌「謝敷節」をみってみる。一番に歌われる歌詞は、古典音楽のそれと変わらない。しかし、歌い方を文字化したときには相当の違いが見受けられる。

歌い方

ササ スンドーヨー

ざじち いたびしに

ササ スンドーヨー

うちゃいひく なみぬ

ササ シムヌハナ

ざしち みやらびぬヨ

ササ スンドーヨー

みわれ はぐち

ササ ウキトゥリ ヘイ

*大観（沖縄）240-1頁

ハヤシコトバ「ササ スンドーヨー」が冒頭にきて、同じものが一句目、三句目のあとにも入っている。二句目、四句目のあとにも相応のハヤシコトバが歌われる。特に四句目のあとの「ウキトゥリヨー」は、歌掛け（交互唱）のおり、一方の集団が相方の集団に向かって「この歌を受け取りなさい」という意味だとされる。相手方もそれに応え、次の歌は「ササ ウキトツセ」（受け取ったよ）で始まるのである。

ここまで記せば、臼太鼓歌「謝敷節」が、前にあげた古典音楽「しゅんどう節」と似ていることに気付くであろう。そこでは「シュンドウ」というハヤシコトバが四度まで繰り返し出てきて、おまけに最後が「ウキトツサ」で締められている。『日本民謡大観（沖縄 奄美）沖縄諸島篇』の解説もはっきりと両者は同系である、と断じている（241頁）。

とすれば、歌詞の先後関係はどう考えられるであろうか。私の結論をいうと、「諸鈍長浜に……」の方が先だということである。「スンドー」「シュンドウ」というハヤシコトバには、「謝敷」よりは「諸鈍」のほうが結びつきやすい。おそらくこの地方でも最初は「諸鈍」を歌い込んだ歌を移入したのだが、歌自身定着していくうちに、自らの土地名を取り込んだのだろうと想像される。

以上を一応の結論として、以下奄美各地に伝わる「諸鈍長浜節」系統の歌の系譜に話を戻す。

沖縄を終わって、奄美に戻るのはいささか不自然にも思えるが、諸鈍が場所柄、かつて琉球文物の流入口であったことを思うと、最初に沖縄との繋がりを押さえておく方が方法論的にも有効だと考えたからにはほかならない。

5. 奄美大島、加計呂麻島における八月歌のなかの関連歌

「八月歌」とは、奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島（一部）の旧暦八月の祀り日に行われる八月踊りに伴う歌のことである。踊りは集落単位で行われ、男性の集団と女性の集団が1つないし2つの輪を作るか、渦巻状になって、歌を掛け合いながら踊っていくというのが原則である。

曲目は、今日少ないところでは1、2曲、多いところでは30曲を越えるところもあるが、踊り歌として「諸鈍長浜」（八月歌では「節」を除いていう所が多い）を持っている集落は少ない。

ここに諸鈍の八月歌「諸鈍長浜」をあげてみる。八月歌の歌詞はその場、その時に応じて出すのがふつうで、きっちり決まってはいるが、歌われる歌詞に傾向があることはむろんのことである。例にならって代表的歌詞と歌い方をあげる。

代表的歌詞

○しよどぬ ながはまに
うちゃげいひく なみや
しよどぬ みやらびぬ
わらい はぐき

共通語訳略（以下同じ）

*大観（奄美）273頁

○しよどぬ ながはまや
やまとがでい とよむ
しよどぬ みやらびや
しまじゅ とよむ

*同上

○うらうらぬ ふかさ
しよどぬうらぬ ふかさ
しよどぬ みやらびぬ
うみいぬ ふかさ

*同上

歌い方

しよどぬ ながはまに
うちゃげいひく なみや
ヒヤルガヘエ ハレ
しよどぬ みやらびぬ
わらい はぐき
ウセ ヒヤルガヘエ

*大観（奄美）272-3頁

文字化して吟味する限りでは、遊び歌「諸鈍長浜節」とほとんど変わらないことに気づくであろう。しかし、歌のテンポや曲調は独唱と斉唱の違いからも同じであることはあり得ない。しかし、『日本民謡大観（沖縄 奄美）奄美諸島篇』の解説によれば、諸鈍の八月歌「諸鈍長浜」の場合、裏声が用いられるというから、いくぶん遊び歌と近いものを感じられる。

チジン（鼓）を楽器とした集団歌舞の歌、八月歌と、サンシン（三味線）を主要楽器とし、個人の歌である遊び歌がどういう関係にあるかは、個々に考えるべきで、どちらが先でどちらが後だとは一般化できない。この「諸鈍長浜」に限るならば、遊び歌が何時の頃か、八月歌に

取り上げられた、というのが私の見解である。

6. 喜界島における関連歌

喜界島民謡は、奄美大島とほとんど変わらないというのが多くの人たちの印象であるが、それは近年（この4、50年来のこととってよいだろうか）、奄美大島の民謡のなかでも、特に遊び歌が喜界島に入ったせいだと考えられる。私のフィールドワークの実感では、確かに伝承されている曲の系統は、どこかで奄美大島の歌と結びつくものではあるが、「やっちゃ坊節」や「長朝花節」などがサンシン（三味線）太鼓で踊り歌風に歌われるなど、古風さが目立った。

「諸鈍長浜節」との繋がりで見えていくとき、看過できないのが遊び歌「池治長浜節」である。残されている歌詞は以下のようなものである。

- | | | |
|----------------|-----------------|---------|
| ○いちじはま くいいてい | 池治（地名）の浜を 越えて | |
| すみゆしば くいいてい | 住吉（地名）を 越えて | |
| なーま しゅらめらび | 中間（地名）の きれいな女童を | |
| ちゅみどう みちやる | 一目だけ 見たことだ | *大成510頁 |
| ○しゅどうん ながはまぬ | 諸鈍の 長浜が | |
| いちながさ あていむ | 如何に長く あっても | |
| いちじ ながはまぬ | 池治の 長浜の | |
| ういや きらぬ | 上は いかない | *同上 |
| ○いちじ はまながし | 池治の 浜づたいを | |
| うちゃぎうちゃぎする なみや | 打ち上げ打ち上げする 波は | |
| いちじ めーらびぬ | 池治の 女童の | |
| わらい はぐち | 笑った 歯茎のようだ | *同上 |

出てくる地名は、「諸鈍」以外は喜界島のものである。特に3首目は、沖縄の「謝敷節」でみたように、「諸鈍」のいい替えであることは明らかである。

残念ながら、歌われ方まで文字化された資料は不明である。上の歌詞の採集者、久保けんお氏は3首の紹介のあとに「琉歌『諸鈍長浜節』の類歌とみてよいが曲は相当違う」といつている。しかし、民謡の伝承において最も変わりやすいのが曲調である、というのは私の民謡研究の結果として得た、ひとつの結論でもある。断言は控えなければならないが、「諸鈍長浜節」の系統であることは間違いないと思う。

今また、喜界島には、八月歌として「諸鈍長浜」が歌われていることも分かった。インターネット上に録音資料が公表されている同島川嶺集落のものである^(注16)。本来男女の歌掛けであったと思われるが、ここでは女性が二つのグループに分かれ歌掛けをしている。打ち出しの歌詞のみあげておく。

- | | |
|-------------|------------------|
| しょどんの ながはまや | 諸鈍 長浜の |
| うちゃげ わらべ | 打ち上げては引く 童（意味不明） |
| しょどん みやらべぬ | 諸鈍の 女童の |
| わらい はぐき | 笑ったときの 歯茎 |

歌詞の上からみれば、甲の二句目「うちゃげ めらべ」は「うちゃげひく なみや」の転で

あろう。問題はこの歌に「ヒヤルガヘー」系のハヤシコトバが全く出てこないことであるが、おそらく欠落させてしまったに違いなく、「諸鈍長浜節」「池治長浜節」と繋がりあると考えるのが自然である。

7. 徳之島における関連歌

徳之島も八月踊り系の歌舞（曲種、踊りの形態等は同じだが、7月を折り目と考えている地域が広くあり、当然「八月踊り」とはいえないので仮にこう呼ぶ）があるという点と、音楽的に民謡音階や律音階が主流で、琉球音階がそれほど入っていないという点で、奄美大島と文化圏は一つだといえるかと思う。

この島の遊び歌に「諸鈍長浜節」があるので、歌詞と歌い方をあげる。

代表的歌詞

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| ○しょどんぬ ながはまや | 諸鈍の 長浜は |
| やまとうがでい はやてい | やまと（本土）まで はやって |
| しょどんぬ めわらべや | 諸鈍の 女童は |
| しまじまに はやて | しまじま（各集落）に はやって *井之川 大成521頁 |
| ○うらうらぬ ふかさ | 浦々の 深いのは |
| ぶまうらぬ ふかさ | 母間（地名）浦の 深さ |
| ぶまぬ めれんきゃぬ | 母間の 女童たちの |
| うめぬ ふかさ | 思いの 深さ *同上 |

歌い方

- エーイ
- しょどんぬ ながはまやイ
やまとうがでい はやてい
ヘーヤルガ
アレ しょどんぬ めわらべや
しまじまに はやてい
ウセ ヒヤルガヘー *同上

ここにあげた1首目は、前掲の奄美大島用集落の3首目と同じものである。この「はやて」が用では「とよも」と歌われている。違いはそれだけである。

同様に2首目は、用の4首目に出てくる「諸鈍」がそっくり「母間」にいい替えられたことが分かる。

歌詞はともかくとして、実際歌われるときに「ヘーヤルガ」「ヒヤルガヘー」というハヤシコトバが出てくるのが、奄美大島の「諸鈍長浜節」と同系であることを決定的に裏付けているのである。

次は、八月踊り系歌舞の「諸鈍長浜」と「うちこち」である。

現在、「諸鈍長浜節」系の歌として採集され、記録されているものは、花徳集落に伝わる「諸鈍長浜」と、阿権集落に伝わる「うちこち」の2曲である。

花徳集落の場合は、独立した歌とはみなされず、同島の「田植歌」を八月踊り化した「投げ

や節」のシメ歌として歌われる。シメ歌とは、歌の途中から曲の速さを変えるために節を変える、その節のことをいうのである。これもいうまでもなく、男女の歌掛けであるから、例えば次のように歌われる。

〈男〉しょどん ながはまや	諸鈍の 長浜の
うちゃげひく なみぐわ	打ち上げては引く 波っこ
ヘンヤルガヘー	(ハヤシコトバ)
〈女〉ういくとうば いるぐわ	あなたの言葉が 入って
うもてんば しぬき	あなたを思うと しんどい
ヘンヤルガヘー	(ハヤシコトバ)

*大成434頁

「諸鈍」の歌われる歌詞は上の句で途切れている。実は、徳之島の八月踊り系の歌われ方は、多く8886調歌詞のやり取りではなく、88調ないし86調歌詞で掛け合いを続けていくのである。

ここにあげた歌の場合、打ち出しの歌詞に、本来つながるべく文句があったはずなのだが、それがいつの間にか忘れられ、意味上つながらない歌詞が歌われるようになったのだと考えられる。

やはりこの歌でも「ヘンヤルガヘー」というハヤシコトバが歌われることが重要である。これをもって、奄美大島の「諸鈍長浜節」と繋がることは否定できないのである。

阿権集落で歌われる「うちこち」には、「諸鈍」を歌った歌詞は出てこないが、歌い方をみると無関係とは思われなくなってくる。

〈甲〉うしこしに	(意味不詳)
うしぬとうり しえて	鴛の鳥を 据えて
ヒヤルガフェー ヤレー	(ハヤシコトバ)
〈乙〉ういとわきゃ ゆろて	あなたと私達が 寄り合って
いちあすで みちゃんが	何時遊んで みただらう
ヒヤルガフェー ヤレー	(ハヤシコトバ)

*集成(奄美)432頁

これも掛け合いで歌われた例である。甲の歌詞は、58調だが、本来88調であったものの崩れかもしれない。いずれにせよ、甲の文句と乙の文句は意味の上でつながっていない。その点は花徳の「諸鈍長浜」と同じである。

問題は、この歌でも「ヒヤルガフェー」というハヤシコトバが歌われていることで、「諸鈍長浜」との関連を考慮せずにはすまないのである。

8. 沖永良部における関連歌

沖永良部島でも、遊び歌として「諸鈍長浜節」系統の歌が歌われていることは確認していたが、公になった採集記録をみつけることができずにいた。しかし、今回地元の伝承者、川畑先民氏^(註17)から聞き書きをしたり、氏の協力で見ることの出来た、1989年に和泊町民謡同好会が作成した冊子『沖永良部民謡集』のなかに「ショドン ナガハマ」という歌が収載されていることを知り、実際が明らかになった。

先ず、和泊町の冊子にある「ショドン ナガハマ」(ここでは「節」は付けない)にあげら

れた歌詞4首をあげる。

- | | |
|--|--|
| ○しょどん ながはまに
うちゃいひく なみは
いけじ みやらびぬ
みわれ はぐち | 諸鈍の 長浜に
打ち上げては引く 波は
池地 女童の
目笑い 歯茎 |
| ○しょどんぬ みやらびぬ
いちゃんちゆらさ あていむ
いけじ みやらびぬ
ういや いかむ | 諸鈍の 女童の
いかにきれいで あっても
池地の 女童の
上は いかない |
| ○いけじ みやらびぬ
ふしゃぬむぬや ぬーが
うしまきとう ひやだけ
しきちゃ まきちゃ | 池地の 女童の
欲しいものは 何か
うし巻きと ひや竹
しきちゃ まきちゃ |
| ○しきちゃとうてい ぬーしゅよ
まきちゃとうてい ぬーしよ
いけじ みやらびぬ
ぬのどう まちゆる | しきちゃを取って どうするのか
まきちゃを取って どうするのか
池地の 女童の
布を 巻くのだ |

なお、歌詞ごとに記されている歌い方をあげると、

ウシー
しょどん ながはまに
うちゃいひく なみや
ヒヤルガヘー
ウシ
いけじ みやらびぬ
みわれ はぐち
ウシー ヒヤルガヘー
ヨハレ ヒヤルガヘー

となり、奄美大島の「諸鈍長浜節」と同系であることは疑いようがない。

なお、前掲、川畑先民氏が記憶するところでは、古老たちは同系曲を「ちどり (千鳥) 長浜」といつて歌っていたという。はっきりした歌詞の記憶はないといわれるが、「諸鈍長浜」が「千鳥長浜」に変化したものであろう。奄美、沖縄では「千鳥」はよく歌に出てくる鳥であり^(注18)、「千鳥長浜節」があっても不思議ではない。

いずれにせよ、「諸鈍長浜節」が、相当古くから沖永良部に伝わる歌であることは確かだが、川畑氏は、奄美大島にほとんど同じ歌があることが分かった以上、これでは島の民謡とはいえないといい、「永良部長浜節」として歌おう、という試みをしている。今後、どのような形で定着するのかは予想できないが、歌の歩みの一齣を明らかにしておくためにも、川畑氏の歌詞を記しておきたい。

- | | |
|------------|----------|
| ○えらぶ ながはまに | 永良部の 長浜に |
|------------|----------|

うちゃげひく なみや
えらぶ みやらびぬ
しがた でもぬ

打ち上げては引く 波は
沖永良部の 女童の
姿 であるよ

9. 与論島における関連歌

おしまいにあげるのが、与論島の「しゅごう中棚節」である。与論島には、沖永良部同様、八月踊り系の芸能はないので、三線を伴奏に歌われる遊び歌ということになる。

「しゅごう中棚」というのは、与論島にある地名で、『与論島の民謡と民俗』^(註19)によると、墓地のある島の南端中央辺りを指す説や、海辺の、飲食しながら歌い踊る遊びの場を指す説があるという。もしかすると固有名詞というより、「しゅごう」は潮水も混じっている海に近い川をいい、「中棚」は平べったい広場を指す普通名詞というほうが相応しいともいえる。ともかくここに、「しゅごう中棚」ないし「しゅごう」という地名が出てくる歌詞をあげる。

- | | |
|---|---|
| ○しゅごうぬ なかだなや
わがはゆてい あたり
わがはゆい やしゃぬ
ぬだき なーち | しゅごうの中棚には
私がつって いたよ
我通いの 足りなくなったので
ぬだち(雑草名)が 生えた *茶花・大観(補遺) 290頁 |
| ○いひゃぬ ななばなり
うちゃがていどう みゆる
あしび うちゃがゆる
しゅごぬ ぱんた | 伊平屋島の 七離れ
浮き上がって 見える
遊びも 浮き上がってくる
しゅごの ぱんた(高台) *同上 |
| ○しゅがぬ なかだなや
うちゃがていどう みゆる
あしび うちゃがゆる
しゅごぬ はんた | しゅごの 中棚は
浮き上がって 見える
遊びも 浮き上がってくる
しゅごの 崖端 *同上 |

歌われ方は二様ある。ハヤシコトバが違うのである。

歌い方 その1

しゅごうぬ なかだなや
わがはゆてい あたり
ヘンヨー ヌーガヨ ウッシー
わがはゆい やしゃぬ
ぬだき なーち
ウッシー ヘンヨー ヌーガヤ
マタガディ ヘンヨー ヌーガヨ

*茶花・大観(補遺) 290-2頁

歌い方 その2

いひゃぬ ななばなり
うちゃがていどう みゆる
ヘンヨー ヌガヒヤルヘ ウッシー
あしび うちゃがゆる

しゅごぬ ぱんた

ウッシー ヘンヨー ヌガヒャルヨー

マタガディ ヘンヨー ヌガヒャルヨー

*同上

「ヌーガヨ」というハヤシコトバが、たかだか「ヌガヒャルヨ」に変わったに過ぎない。しかし、「ヌガヒャルヨ」が、各地の「諸鈍長浜節」にあった「ヒャルガフェー」に繋がって行くことは紛れもない事実である。

ついでながら、先掲『与論島の民謡と民俗』には、かつて与論島に、

○いちょーき ながばまに

いちょーき (地名) の 長浜に

うちゃいひく なみや

打ち上げては引く 波は

あがさ めーらびぬ

赤佐 (地名) の 女童の

みわれ はぐき

目笑い 歯茎

*同書593頁

という歌詞があったといい、「諸鈍長浜 (しゅどーぬながばま)」という曲名があったことも書かれている。曲の趣は与論と奄美大島のとは余りにも違うが、「しゅごぬ中棚」も、もともとは「諸鈍長浜節」であったというのが著者の見解である。私もそれが正しいと思う。

かくて「諸鈍長浜節」の系譜をたどる旅は終えるが、歌というものは何処までも根を張り、その土地土地に花を咲かせるというきわめて強い生命力を持った生き物であることを改めて確認することとなった。

[注]

1. 町田嘉章・浅野健二編、1960年、岩波書店発行
2. 外間守善編、1971年、三一書房発行
3. 田畑英勝・亀井勝信・外間守善編、1979年、角川書店発行
4. 富浜定吉著、1980年、文教図書発行
5. 日本放送協会編、1991年、日本放送出版協会発行
6. 那覇出版社編集部編、当間一郎監修、1992年、那覇出版社発行
7. 日本放送協会編、1993年、日本放送出版協会発行
8. 東京芸術大学民族音楽ゼミナール編、1995年、日本放送出版協会発行
9. 奄美民謡は大きく、①「行事の歌」②「仕事の歌」③「遊びの歌」に分類することが可能である。「遊び歌」はいうまでもなく③に属するものだが、「しまうた」「サンシン (三味線) 歌」などともいわれ、奄美の「歌遊び」といわれる場で歌われるものである。本来は掛け合いで歌われるが、その習慣は近年少なくなった。
10. 注2の分類では①に属する。旧暦8月 (1部の地域では7月) は、稲作中心の時代、1年の折目とみなされた時期で、多くの祭りが集中する。八月踊り (夏目踊り、浜踊りなどというところもある) はそこで歌い、踊られる集団歌舞。集落単位の踊りで、広場で行われたり、集落中の家を一軒一軒廻って、その庭で行われる。男性グループと女性グループとが歌を掛け合いながら踊るのが基本だが、近年くずれつつある集落もないではない。楽器は手に持ちながら打つ、チジンといわれる太鼓で、これも何人かの踊り手が歌いつつ、踊りつつ打つ。

11. 琉球王府で継承されてきた音楽をこのように呼び、庶民の間で歌われてきた民謡とは普通は区別する。「工工四」（クンクンシー）と呼ばれる楽譜が用いられてきたことも重要である。
12. 注2の書に解題とともに全文が翻字されている。
13. 注8の書、332-3頁など参照
14. 注8の書、87-8頁など参照
15. 注8の書、56-7頁など参照
16. ホームページ「ラジオ喜界」
<http://www.kikaijima.com/simauta/06kawa-hatigaall-32.html>
17. 川畑氏は昭和7年生まれ。知名町上城出身
18. 沖縄の舞踊曲「浜千鳥節」、奄美大島の八月歌「ちじゅりゃ浜」等があげられる。
19. 川村俊英編著、1984年、自家出版